

エーテル可溶成分(主としてバルバチン酸)を除いたものをアセトンで抽出し、そのエキスの中からデンドロイジン(=ボーフィリリク酸)を発見したので、これを含まない *Cl. Floerkeana* のすべての変種から区別することができる。尚先に筆者が *alpina* 中には別に直消光の柱晶の存在を述べているが、その本体についてはまだ何等の手懸りはない。

従来の *Cl. alpina* の産地として知られている北海道; トムラウシ, 芦別岳; 陸奥: 八甲田酸湯; 越中: 白馬小蓮華, 白馬乗鞍, 上ノ岳鞍部; 越後イブリサシ・地神山; 甲斐: 八ヶ岳, 仙水峠; 信濃: 乗鞍肩小屋; 武蔵: 秩父甲武信岳一破不山; 四国剣山等は何れも 1500 m 以上の地点であるが、低地の産地としては近江: 栗太郡田ノ上村字里 (=大津市字里) で約 500 m 位の地点に産した。

□廣江美之助: 源氏物語の植物 The plants in the tale of Genji 古典植物全集第一巻 330 頁, 1969 年 9 月, 2500 円, 有明書房。全 25 巻を予定している全集の第一巻である。長い歴史をもつ日本人の生活の中に、身近の植物が実用的にも精神的にも大きな役割をはたしてきている。これを明らかにする上で、古典文書に現われる植物を研究することは大切なことである。しかし万葉植物の研究を除いては、まとまって書かれたものは殆んどない状態である。したがってこれを研究し、順次発表していくとする著者の意図には、大いに声援を送りたい所である。なかなか大変な仕事であり、それだけに充分慎重を期して、綿密な研究をしていただきたいのである。第一巻の源氏物語を見ると、期待に反することがかなり見られるのは残念である。例えば葵を簡単にヒマワリにあてているが、これはアメリカ原産の植物で、一般には江戸時代の初期に入ってきたものとされている。コロンブスのアメリカ大陸発見以前の平安時代に、日本にすでに入っていたとするのには、よほどはっきりした根拠がなければならない。またワタについては、続日本紀や類聚国史などの古文献を引用している。しかしその当時の綿は著者もカジノキの所でふれているが、一部は楮布であろうとされているし、またパンヤ綿とモメン綿との区別がはっきりしていなかったともいわれる。その辺の考証をしっかりとやらしてもらわなければ、ほんとうに古典植物の解説をしたことにならない。イワツツジは先人のいくつかの報告がある、それには全然ふれないで、源氏物語とは関係のないと思われる高山植物のイワツツジのくわしい解説は必要のないことと思う。少し見ただけでこうした例がいくらかでも出てくるのでは困るのである。

著者は京都に住んでいるので古典植物の研究には有利な立場にある。カジの葉に願いごとを書いて捧げる七夕祭、ススキやチガヤにちなんだ夏越祭など、昔の生活にちなんださまざまなことがのせてあり、京都にいる者でなければ書けない色々なことが述べてある。学名の考証とか、基準標本の説明とか、源氏物語に関係ないような余計なことは省いて、植物の解説に力点を置いてもらわないと、折角有利な立場にある著者の研究が生きてこないことになる。今後の著書にはこうした点を充分注意していただきたいものである。

(山崎 敬)